

# 土佐のわらべ

第394号 《第416回（2014. 5. 8）子どもの本の読書会記録》参加者6名・文書参加7名

『アンの子りかご 村岡花子の生涯』 村岡恵理／著 マガジンハウス

「赤毛のアン」は1981年（村岡花子訳）、2002年（掛川恭子訳・講談社・完訳クラシック）に、読書会で取り上げています。世界中の少女たちがあこがれるアンの世界。「アンは乙女のバイブル」と語られた方も(笑)。想像力豊かなアン成長とプリンス・エドワード島の風景を、心に残る美しい言葉で表現し今に伝えてくれているのが、翻訳家の村岡花子です。明治時代、貧しいクリスチャンの娘だった花子はカナダ人宣教師のミッション・スクールに編入。厳しい英語教育を受けます。腹心の友との出会い、翻訳家となり、道ならぬ恋をし、やがて結婚。長男を亡くし、関東大震災に遭い、戦争へ。明治・大正・昭和とその激動の時代を動かしてきた人々との交流の広さ・深さにも驚きました。翻訳の傍ら、女流文学者達や婦人参政権を求めて市川房枝らとも交流。活動の幅が広く、包括的に物事を見る眼を持っていた花子は、それあって日本の近代史、女性史そのものを生きてこられたのです。本書は伝記のような、私小説のような書き方で、読書会では「集中して読めなかった」という感想も聞かれましたが、波乱万丈な花子の生涯について、孫娘だからこそ書けた評伝なのだと思います。

花子と運命の本との出会いは戦争前。社会情勢が不穏になり帰国することになったカナダ人宣教師のミス・ショーから「友情の記念に」と贈られたのが

『アン・オブ・グリーン・ゲイブルス』。「いつかまたきつと、平和が訪れます。その時、この本をあなたの手で、日本の少女たちに紹介してください」と。困難極まりない戦時中に、この本を訳すことが花子の心の支えとなっていきます。「時代の暗い空気を全く感じさせず、プリンス・エドワード島のバラ色の世界をどうイメージしたのだろうか？」花子自身がアン言葉に励まされながらこの時代を乗り切ったのでしょね。花子が人生の集大成として世に送り出した『赤毛のアン』。アンシリーズをぜひ読んでみてください。今の貴女の年齢や心情に沿ったアンがそこにいてくれますよ、きつと。

花子は、今でも読み継がれている『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』『アンディとらいおん』など絵本も数多く翻訳。家族で楽しめる本を広めたいという思いは、身をもって子どもの教育の大切さを知っていたからこそ。家庭文庫の活動がきっかけで、翻訳家として石井桃子との交流も生まれています。「どこの国の作家が書いた本なのか…と意識せずに自由に世界中の本を読むことができる幸せな時代に生きている。それは、時代を切り開いてきた花子のような翻訳者の苦労があつてこそ。」とは読書会の皆さんの声。心おきなく本を読める幸せをかみ締めた読書会でした。

(C.O)